

墮胎罪という犯罪

松本侑壬子・ジャーナリスト

この映画の時代背景は1950年、場所はロンドンの労働者階級が暮らす街。家族の機微を描けば並ぶものがないマイク・リー監督が、ここを舞台に鮮やかに描き出す夫婦の年輪と愛の絆の物語である。ただし、そのキーワードが墮胎罪というから穏やかではない。

中年の主婦ヴェラ・ドレイク（イメルダ・スタウトン）は、裕福な家庭の通いの家政婦として働くかたわら、体の具合の悪い隣人を訪ねてはくれとなく世話をしたり、ひとり暮らしの実母の面倒を見たりするのが日課である。小柄な体をよく動かして、化粧つけない明るい笑顔で周囲の人々を温かく包み込む。家庭ではまさに太陽である。

弟の経営する自動車修理工場で働く実直な夫スタン（フィル・デヴィス）。洋服屋で働きながら夜学に通い、週末はダンスホールで踊る快活な息子シド。自宅と職場の工場を往復するだけの無口でおとなしい娘のエセル。こんな家族と共に一家団欒の食卓を囲んでいたある雪の夜、突然やってきた警察にヴェラは逮捕される。驚愕する一同の前を素直に連行されるヴェラには、十分に思い当たるふしがあった。長年誰にも言えなかった秘密が、ついに漏れたのだ。ヴェラは望まない妊娠をして困っている女たちにこっそりと墮胎の手助けをしていた。妊娠が母体の命に危険をもたらすという医師の診断がない限り、中絶は違法であり、たとえ許可されても途方もなく高額な費用は誰にでも払えるものではなかった。ヴェラは仲介者である昔からの女友達リリーから連絡が入ると、密かに依頼者の自宅に出かけていった。処置の仕方は、注入器で子宮内に石鹼水を入れ、翌日流産するのを

待つ、という原始的なものである。まだあどけなさの残る黒い肌の娘、不倫の果ての結末に悩む人妻、貧しくて産んでも育てられない主婦、遊びなれた様子でも酒で虚勢を張る女…怯える彼女らを励ましながらヴェラは慣れた手順で仕事を終わるとやさしい言葉を残して帰っていった。すべて無料。実はリリーは女たちから報酬を受け取っていたのだが、ヴェラには内緒であり、かえってヴェラに闇物資を売りつけていた。ヴェラは困った女たちを何とか助けてあげたいという一心から非法法は承知のうえでの“犯罪”であった。

墮胎罪という犯罪は、女性にとって収まりの悪い犯罪だ。だれも喜んで中絶＝墮胎をするものはいない。妊娠は一人ではできないが、中絶の当事者は女性であり、相手は問われない。中絶の苦みの被害者は当該女性自身なのに、裁くのは国家だ。許される中絶以外の中絶に手を貸した者も犯罪者とされる。フランス映画『主婦マリーがしたこと』（1988年）は、第二次世界大戦中に墮胎が国家反逆罪だとして、闇で墮胎手術をした主婦がフランス史上最後の死刑執行女囚となった実話の映画化だ。主婦マリーは、はっきりとお金目的であったが、夫の密告で逮捕されるなど後味の悪さもあって、まったく不条理な話だ。

ヴェラの場合は、それに比べれば何という温かな味わいであろうか。特にすばらしいのは、無骨な夫スタンの変身だ。妻の危機に際して、ほれぼれするほど献身的に妻を守り、家族を励ます、文字通り亭主の鑑である。墮胎罪が夫婦の絆を強めたと言えば、これまた皮肉な話ではあるが、これが日本だったら？ と思いは次へとつながっていく。



英・仏・ニュージーランド映画（125分）／ マイク・リー監督

『 ヴェラ・ドレイク 』

初夏、銀座テアトルシネマにてロードショー

